

# 規模の大きさを生かした町内会

## 近隣町内会や子ども会と連携して多彩に活動

### 区内有数の大規模町内会

南小泉町内会は、加入世帯数が約1,500世帯、区域も3つの小学校区にまたがる町内会です。昔ながらの区割りが今に残る若林区では数十世帯規模の町内会もよく見られる中、ここまで大規模な町内会は珍しい存在です。

会長の小澤さんは、「かつて、このあたりは農地が多く人家が点在していたのですが、次第に宅地化が進み、建売住宅や賃貸アパートも増えた結果、大規模な町内会になりました」と語ります。東日本大震災後、沿岸部から町内の貸家やアパートに転居してきた被災者世帯も多いといえます。「アパート入居者は実態を把握するのが困難なので、いざという時が心配。加入促進策は、当町内会でも大きな課題です」。

### 「規模によるメリット」「きめ細やかさ」の双方を追求

これだけ大規模な町内会ともなれば住民同士の顔が見えず、身動きが取りづらいのでは？ この疑問に、小澤さんはこう答えてくれました。「町内を15の『区』に分けて定例区長会議を毎月開催し、連絡・調整を図っています。一方、町内を南小泉、古城、遠見塚の3ブロックに分けて活動費を配分し、お花見会や早起きウォーキングなどの各種行事を、より地域に密着した形で実施しています」。

実は、町内会自体を3ブロックに分割する提案が総会で出されていたのですが、2年越しで検討した結果、大規模町内会なら活動の担い手や財源を確保しやすいので多様な活動ができる、という理由により、現在の体制を維持することに。「規模によるメリット」と「きめ細やかさ」、双方を備えた町内会活動の良さが、改めて確認できたそうです。



朝の爽やかな空気の中でウォーキング

行事の開催は地域に密着したブロック単位で



消防署員の指導のもと防災訓練を実施

安全安心のまちづくりが最優先課題

### 災害時要援護者数を上回る支援者を確保 防災マップの改定も

「安全安心のまちづくりは、当町内会の最優先課題」という小澤さん。平成25年度から災害時要援護者支援の体制づくりに取り組んできた結果、50名超の要援護者に対して60名超の方が支援者を引き受けてくれました。「区障害高齢課の保健師を講師として支援の必要性と基本的な心構えを学習したのも、支援者の理解を深めるのに役立ちました」と小澤さんは振り返ります。

また、平成27年度は町内会創立60周年を迎えることから、記念事業として、平成16年に作成した「防災マップ」の改定版を作成します。このマップは、世帯名、避難所、消火栓、町内掲示板などの場所を住宅地図に示し、災害時の対応や関係機関の連絡先もまとめるもの。最新の状況を反映させ、住民に安心してもらおうのが狙いです。



防災マップ改定に向けた検討作業

### 地域の神社を核としたお祭りで顔の見える関係づくりを

町内に古くからある猫塚古墳のそばに鎮座する「少林(わかばやし)神社」。神社の祭礼や子ども会による神輿巡行が、今に続いています。小澤さんは神社を核として地域の結束を固めたいと、地域が主体となる「南小泉地域ふれあい祭り」を平成26年9月に初めて開催。近隣の町内会や地域の子ども会などの協力を得て、出店を並べました。平成27年9月には「南小泉・古城・遠見塚地域ふれあい祭り」に名称を変更し、新たに学区民体育振興会の協力を得て出店を充実させるとともに、地域の子もたちや趣味の会のメンバーに歌や踊りを披露してもらい、いっそう賑やかに。

「区域が3つの小学校区にまたがるのを幸い、各学区内の関係団体の行事に顔を出して協力をお願いしました。そのかいあって、町内会エリアを超えた人と人のつながりができました」と小澤さん。「住民各自がお祭りに関わって互いに顔の見える関係になれば、非常時にも協力し合えるはず。大変だがこれからも続けていきたい」と決意を語ってくれました。



静かに佇む少林(わかばやし)神社



祭りの夜を盛り上げる子どもたちの歌声

(取材・執筆 若林区まちづくり推進課)

# 「とうちゃん会」とともに 地域づくり

## 町内会と「平澗とうちゃん会」の取り組み

### 平澗町内会について

現在、少子高齢化や生活環境の多様化により、活動の担い手不足が町内会共通の問題となっています。しかし「平澗町内会ではそういった悩みはない」と町内会長の山口さんは語ります。

平澗町内会は、太白区南西部の袋原地区に位置し、昭和54年に発足、平成27年現在の会員数は約370世帯です。

広報誌「ひらぶち」を毎月発行しているほか、防犯活動、自主防災訓練、学校ボランティアによる巡視など、地域の安全・安心なまちづくりに日々励んでいます。こうした活動を支える組織として、「平澗とうちゃん会」という有志の会が存在します。

### 平澗とうちゃん会結成まで

平澗とうちゃん会は、山口さんが体育部長をされていた平成8年に立ち上げ、現在は38名の会員で活動しています。現在のとうちゃん会の会長は4代目で、会員は30代から70代と年齢層が幅広く、様々な活動を行い、地域の活性化に貢献しています。

この会が設立されたきっかけは、地域住民の交流の場を作るため、地域の袋原体育振興会のスポーツ大会後に懇親会を始めたことでした。

それまでは、大会終了後に交流する機会がないため、顔見知りではあるものの、名前や住んでいるところが分からない状態でした。そこで町内会長の山口さんが、大会終了後に懇親会を開くよう提案、回を重ねるうちに平澗とうちゃん会を設立しようということになりました。



(左から)澤田総務部長、山口会長、尾山副会長

地域の安全・安心な  
まちづくりに  
日々励んでいます



子どもから大人まで41名の参加があり、楽しい野外キャンプとなった

### 子どもたちに夢を!

とうちゃん会は、夏にはサマーアドベンチャーとして野外キャンプやボウリング大会、冬には餅つき大会などのイベントを実施するほか、町内会活動にも参加しています。

サマーアドベンチャーでは、「子どもたちに夢を!」を合言葉に、平成27年度は総勢41名の親子が参加し、丸森町不動尊公園キャンプ場で野外キャンプを行いました。

餅つき大会では、杵と臼を使用してお餅を作り、地域の皆さんに振る舞います。若い世代の参加も多く、海苔やきなこに加え、チョコやココア味など様々な味付けを考え、参加者が皆で楽しめるような工夫などを行っています。

町内会活動では、夏祭りの舞台設置を手伝ったり、焼き鳥や輪投げなどに出店するほか、自主防災活動隊の災害特別支援隊として、連合町内会の防災訓練にも積極的に参加しています。



サマーアドベンチャーの様子。キャンプ場で川遊び

### 飲みニケーションを大切に

地域にとうちゃん会が存在することで、町内会と若い世代が積極的に関わることができ、次世代の担い手育成につながると、会長の山口さんは語ります。また、若い人同士のつながりによって、とうちゃん会の活動に参加する方もいるとのこと。

年間スケジュールなど活動については会長、副会長、事務局長が話し合って決めますが、働いている会員が多いため、会合は土曜日の夜に開催することが多いそうです。

活動がスムーズに行われている要因は、「飲みニケーションを、ざっくばらんな意見交換の場として活用すること。町内会活動の活性化にも寄与しています。また地域内のトラブルが少ないのも、こうした日頃からの交流にあると思います。」と副会長の尾山さんは語ります。

住み良いまちづくりには、とうちゃん会のように、地域の関連団体が、それぞれの特色を生かしながら連携することが効果的なようです。



平澗町内会盆踊りでとうちゃん会が出店した『輪投げ』は、子どもたちが列を作るほどの賑わい

(取材・執筆 太白区まちづくり推進課)

次世代の  
担い手育成に  
つながると  
思います

# 高森東連合町内会

## 高森絆コンサートによるまちづくり

きっかけは、傘寿(80歳)を超えた大先輩

高森東連合町内会のエリアは、泉中央駅から北西部に位置しています。エリアの中心には、大堤と呼ばれているL字型の池を囲むように散策路や芝生が広がる高森東公園があり、池の水面に映る新緑や紅葉など四季折々の彩りは地域の人々に安らぎをあたえています。

こうした自然に恵まれた高森東連合町内会は、平成27年現在1,895世帯で構成されています。「町内会という組織は親睦会的組織であり、大変と思うのではなく、とにかくみんなで楽しもうというのが大切です」と話すのは、連合町内会長の傅野さん。

かつては地元の人たちにとっても、池の周りは草木が生い茂っており、とても近寄りにくいところだったといいます。このような中、高森五丁目町内会の元役員である傘寿を超えた大先輩の取り組みで、東日本大震災の5年前に池の上に鯉のぼりを掲げたりするのを最初に、水面に灯籠流しを始めました。こうした活動により、池の周りの自然をもっと活



第3回高森絆コンサート 中学生の合唱

用したいと考え、清掃活動を積極的に行うようになったこと。日に日に池がきれいになることで、犯罪抑制にもつながるとともに、釣り禁止区域で釣りをする人も少なくなったといいます。

公園は地域の宝物  
音楽広場はみんなの手作り

高森東公園内には、散策路があり地域住民の散歩コースになっています。地元の「高森東ふるさとづくりの会」の皆さんが定期的に清掃活動を行っているほか、4月、10月には町内会等を中心に地元中学校の生徒も加え、地域全体で高森東公園内の側溝などの清掃活動を大々的に行っています。また、公園内の風光明媚な場所に地域住民が自然を活用した手作りの音楽広場をつくり、「高森絆コンサート」を開催するようになりました。コンサート実施の企画や会場設営のための清掃活動を行うことで、地域の自然に親しみながら地域コミュニティの醸成を図っています。

第3回「高森絆コンサート」では、「高森東ふるさとづくりの会」の皆さんがおそろいの緑のベストを着て、笑顔で会場づくりに取り組んでいました。子どもたちの歌声を聴くのが楽しみということで、作業にも力が入ります。



コンサート会場の設営

子どもたちの  
歌声を聴く  
のが楽しみ



第3回高森絆コンサート サークル団体の合奏

コンサートは一生の思い出

コンサートには地元の幼稚園児、小学校、中学校、近隣市民センターで活動するサークルの方々が参加し、発表しています。「子どもたちはこの日の発表に合わせて毎日一生懸命練習してきました」と先生は語ります。音楽広場の自然の中で、発表する時間と空間はきっと子どもたちの記憶に残るとともに、地域への愛着や思い出として財産となることでしょう。「この広場で、小学校、中学校と発表した子どもたちが次世代の子どもたちに継承して欲しいと思います」と会場にいた方は話していました。

自然という財産を利用し  
今後の活動を  
考えるのが楽しい!

「10年後も継続してこの活動ができるようにがんばっていきたいし、継承も重要と考えています」と語るのは、「高森東ふるさとづくりの会」の皆さん。コンサートを演出するため、ピンク色の芝桜を池ののり面に植えたり、子どもたちの成長を願って鯉のぼりを掲げたり、その鯉のぼりが傷んできたので、地域のFMで鯉のぼりを譲ってもらうよう呼びかけてもらったりと、とにかく頭が一杯、と楽しそうに話してくれます。また、あと数十メートルでつながる高森東公園の周回路を完成させたいと考えており、既存の周回路も車椅子も通れるようにと誰にでもやさしい工夫がされています。

その他にも、四季で花が楽しめるようにと桜を植えた

自然という  
財産を中心に  
世代間交流が  
行われている

り、コスモス、カサブランカ、ダリアなどを植えていて、山形県川西町にも視察にいき研究を重ねたそうです。小学校3年生と一緒に地元の方が巣箱づくりを行い、森のところどころに掛けています。巣箱づくりは中学生の先輩がサポートしてくれるといいます。公園の近くの児童館では、地域の子もたちと顔見知りとなることで、将棋やメンコ、ビー玉などの昔の遊びを教えています。また、遊びだけではなく、安全マップづくりも子どもたちと一緒にすることで、危ない箇所を子どもたちと共有でき、防犯上も大変有効です。

自然という財産を中心に世代間交流が活発に行われている高森東地区は、まとまりがあり、連合町内会長の「みんなで楽しく」という言葉がとても合っていると感じました。



第3回高森絆コンサート 子どもたちの合唱



手作りのベンチの安全の確認作業を念入りに行う高森東ふるさとづくり会員

(取材・執筆 泉区まちづくり推進課)